

震災体験を生かす教育

「未来につなぐ防災教育」

～ KOBE きずな 愛 いのち ～

【主担当：神戸市教育委員会】

1. 「あの日」はどこへ

町を歩いていると、まるで「あの日」のことはなかったように感じることもある。

道路も鉄道も港も見違えるような復興を果たし、次々と新しいビルや店舗、公園などもできている。職場や学校に向かう人たちの表情にも、休日買い物を楽しむ人たちの表情にも、明るさが感じられる。

しかし、ふと立ち止まって「あの日」を思うことがある。「あの日」とは、1995年（平成7年）1月17日、未曾有の被害をもたらした『兵庫県南部地震』による『阪神・淡路大震災』のことである。

何気ない日常を取り戻したように見える町には、今も「あの日」の記憶を留めるものがある。

- ◆更地から姿を変えた路上パーキングの数々。
- ◆当時倒壊しなかった建物に残る数々の亀裂。
- ◆震災当時の被害をそのままに保存する施設。
- ◆避難所や仮設住宅から移った人の復興住宅。
- ◆震災や防災に関する新聞やテレビ等の報道。
- ◆そして、たくさんの慰霊碑。

2. 「命日」であるとともに

「あの日」の犠牲者が、6434名の死亡と3名の行方不明が記録されている。

人数の多い少ないが問題なのではなく、いかなる災害においても犠牲者がいる限り、その日

は「命日」である。それは、「祈りの日」でもあり、「誓いの日」でもある。

だからこそ、「震災体験の風化」が問題視された時に、ある指摘がなされたのである。それは、大切な人を失った人にとっては、「風化」という言葉は当てはまらないと。



また、生きのびた人たちの中にも、心や体の後遺症と闘う人がいる。職場を失い全く新しい仕事に挑戦する人がいる。二重債務に苦しむ人もいる。財産や思い出の品々をなくした無念の人もいる。だから、安易に「風化」と言えない現実があることも知っておきたい。

3. 「考える」自分はどこに

自分の人生が、ある日突然の地震で断ち切られるとは誰も考えていない。そして、残された家族の思いとは、いったいどのようなものなのだろうか。わたしたちは、偶然生き残ったにすぎない。だから、さまざまな決意や自己批判をよく耳にした。



「残された者として何をすべきかを考えないと
真の追悼にはならない。」

「あの極限状態を乗り越えてきたことを、必ず
生かさないといけない。」

「『生きることのすばらしさ』を実感したことを
絶対に忘れてはならない。」

「毎日のあわただしさに流されて、考えることを
放棄しがちな自分を改めたい。」

「何かの行動を起こさないと意味がないのに、
できない理由だけを探している。」

「死」をみつめることは、「生きる」を考える
ことに他ならない。わたしたちの前には、連日、
国内や海外から戦争や内紛、テロ、飢餓、大事
故、凶悪犯罪等などのニュースが次々と流れて
くる。刺激的な映像や活字に翻弄されながら生
きているようで、すぐに次の大きなニュースに
目を奪われている。「**落ち着いて考える習慣**」
が失われているようにも感じる。

4. 「教訓」とは何かを問い直す

震災に限らず、あらゆる事件・事故の悲劇が
あるたびに「教訓」とは何か議論されている。

須磨の小学生連続殺傷事件、明石の歩道橋雑
踏事故、尼崎での列車脱線事故、局地的大雨に
よる増水事故台風や豪雨による水害や土砂災害
などもそうである。

何よりも尊い命が奪われたことを直視して、

『命の重さ』を改めて考えることが重要である。

そして、家族の絆や助け合いの大切さも教訓
であり、建物の耐震化や住まいのあり方も教訓
である。

神戸の防災教育は、学習や訓練、地域連携等
を通して、「**未来に向かって力強く生きていく
子どもたち**」の育成を目指している。単に災害
から身を守るスキルや、災害の知識の教育に留
まらず、地域の一員として、ともに生きる力を
育んでいくことである。

これによって、**将来自らボランティア活動を
行うような子どもたち**の育成を目指している。



5. 震災が転機となった神戸の防災教育

震災までの学校の防災教育は、火災時の避難
訓練が中心であったが、不幸な災害が日常の中
で忘れられていた大切なことを呼び覚ますこと
になった。神戸のまちは、破壊され、焼け野原
となり、あの混乱の中で、多くの学校が避難所
となる。教職員は自らも被災しながら、懸命に
子どもたちの安否を確認し、避難所運営に従事
し、学校再開に向けての努力を積み重ねた。

また、比較的被害の小さな学校の教職員も、
激甚地区の避難所の応援に駆けつけ、献身的な
働きをした。そして、震災が突きつけた大きな
課題や複雑な問題を一つ一つ克服していく営み
こそが、復興への道だった。

「命の大切さ」や「助け合い・思いやり・家
族の絆などの大切さ」を改めて痛感した神戸で

は、それらの教訓を踏まえて「新たな防災教育」がスタートした。引渡し訓練を含めた防災訓練の改善、副読本（小学校版「しあわせはこぼろ」及び中学校版「幸せ運ぼう」）の制作・活用に着手した。さらに、心のケアへの取組をはじめ、防災福祉コミュニティ・消防局などとの新たな連携を進めることになった。



6. 「心に響く学習」をめざして

確かに「あの日」を境に大きく神戸の防災教育は変わってきた。しかし、今一度、震災を学ぶ意味を考える時期に来ている。学校教育の中で子どもたちにどのような力を培い、どのような心を育むのかを追究していきたい。

端的な言葉で、「きずな」「愛」「いのち」と集約しているが、言葉だけのものとして上滑りしない実践が求められている。

子どもたちと震災について学ぶ時、写真資料が使われることがある。しかし、「上空」からと「地上」からとでは、かなり印象が違う。

他人事で眺めていたはずの自分が、徐々に写真の世界に近づいていき、「もしも、自分がその場所にいたら…」と仮定して考える。つまり、地上の写真には「想像力を働かせる力」がある。



そして、他人事ならざるものを感じた時、今まで眺めていた自分とは明らかに違う「もう一人の自分」が登場する。その「もう一人の自分」と対話することが大切である。

震災を知らない子どもたちも学習を進めていくうちに、家族や近所に住む人たちの大切さに気付いていく。そして、職務とは言え、懸命に働き続ける人たちの姿にふれ、使命感の強さや人の役に立つことの意義を学ぶ。

さらに、顔も知らない人たちのために、縁もゆかりもない土地から大勢のボランティアが駆けつけたことに「なぜ？」と考えていく。

だからこそ「ひと」の表情に注目する子や、当時の手記を調べたりする子も出てくる。

自分をその場所に置いてみて、想像力を発揮する子どもが増えてくる。

そうすると、「家族を失った人たちは、どんな気持ちで、どう生きたのか」や「避難所生活では、不自由も多かったはずなのになぜ我慢できたのか」「消防の人たちは人命救助と消火作業を同時に強く求められた時には…」「ボランティアの人たちは自分の生活もあるのに、なぜ自分で交通費まで出して来てくれたのか…」などと、心情に目を向けていくようになる。

その背景や理由などを探りながら、「ひと」の**核心**に迫ろうとする。これは、人間としての生き方を問い直す入口に立つことでもある。

それは、共に生きる社会を目指すことであり、一人一人がよりよい社会づくりに参画することにつながる実践でもある。そのような考え方をもとに近年「震災障害者」及び「災害時要援護者」についての研修も進み、授業開発に取り組む機運が高まってきている。

7. もっと「伝える」「備える」を

震災から15年が経過しても、知らなかった事実が次々と出てくる。当時のできごとだけでなく、震災以降の地道な取組や人間的なふれあいなども含めて、もっともっと学ぶべき内容があることを痛感する。

そして、国内や海外（中国・四川省やインドネシア、ハイチ、チリなど）で起きた大地震の報道に触れるたびに、「阪神・淡路大震災」の教訓がどういう形で生かされているのかが話題になっている。15年経過しても忘れてはいけないものがあり、『伝える』という活動が注目されている。有識者や災害復旧時に先頭に立って活躍した人だけでなく、当時子どもだった人までも何かを語る役割を担うようになってきた。

当時の中学生が、15年を経て今の中学生に震災時の様々な経験とともに、復興の過程で得た教訓をきちんと自分の言葉で『伝える』という取組も出てきたことは大きな変化である。

また、遺族や体の不自由な人たちが子どもたちに大切にしてほしいことを『伝える』企画も増えている。この『伝える』ということが、次に『備える』という意識の高まりにつながる。

ただし、いくら意味のある話を聴くにしても事前事後の指導が弱いと、単発の活動に終わってしまいやすい。だからこそ教師も子どもたちも、「新たに学ぶ・ともに学ぶ」という視点を大事にしたいと考える。

8. 期待できる「教師の力」「学校の力」

災害は地震だけでなく、東南海・南海地震による津波被害や、スーパー台風による風水害・高潮被害も喫緊の課題である。

今後は、次の4点を基本的な考え方として、防災教育の推進に努めたい。

1. 震災を知らない世代が増えることを「新たに学ぶ・ともに学ぶ」好機ととらえる
2. 防災マニュアルと防災カリキュラムの総点検を行い、「特色ある教育活動」を展開する
3. 日々の安全点検・安全教育とともに、自信をもって、「命の大切さ」を指導する
4. 人材の発掘とともに、家庭や地域、関係機関と連携して「地域防災力の向上」に努める（協働と参画の精神こそが、前進の鍵である。）

すでに保護者や地域、関係機関とも積極的に連携しながら実践している学校が数多くある。

子どもたちの心に響く授業を心がけ、保護者や地域の方とも日頃から笑顔の関係づくりに努めている学校では、常に創造的・継続的な取組を行っている。これには、教師の**熱意や創造性**、学校としての**組織力**が大きく左右する。



生きていると自然災害も含めて想像できないことが起こるものである。そのような時にこそ「**困った時はお互い様**」だと考え、行動できる社会でありたい。未来社会を担うのは、目の前にいる子どもたちである。

神戸には、豊富な防災教育「教材」と、多様な連携を可能とする「環境」が整っている。



教師や学校には、子どもの心を動かし、地域を変えていく力があることを信じて邁進したい。

「防災教育支援事業」成果報告会 2010.3.9

大震災が生んだ防災教育 神戸の実践

神戸市教育委員会

1. 伝えると備える

「あの日」から月日が流れて...

伝える 備える

「あの日」から それぞれの学校で

子どもや親、地域の願いを

可能な実践を積み上げて

より系統的に地域とともに

復興担当教員 心のケア担当 被災体験の差

防災教育担当 全市研修会 地域連携強化

生々しい被災体験

▲心のケア ▲余裕の無さ

▲多様な価値観 (積極論vs慎重論)

▲伝えにくさ ▲多忙感など

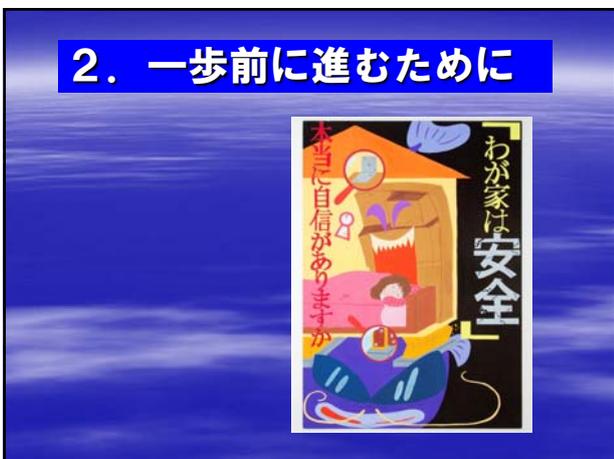
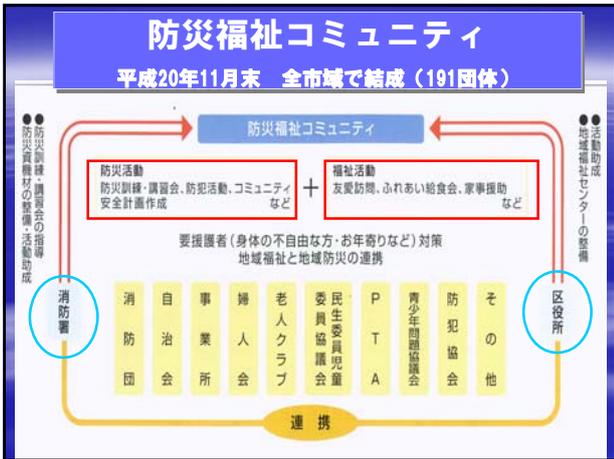
学校ごとの課題も...

伝える

行事・集会で

伝える

授業で



<p>伝える 必ずかしさ</p> <ul style="list-style-type: none"> 多忙化・温度差 ▲したり顔 ▲自信のなさ ▲思いつき <p>魅力ある教材を選ぶ 自校プランを作り直す</p>	<p>備える 必ずかしさ</p> <ul style="list-style-type: none"> 単発的・依存的 ▲イベント化 ▲曖昧な責任 ▲高齢化・固定化 <p>もっと「いま」を知る きちんと役割分担する</p>
---	--

《新たに学ぶ・ともに学ぶ》



- 基本的な考え方**
1. 震災を知らない世代が増えることを「新たに学ぶ・ともに学ぶ」好機ととらえる
 2. 防災マニュアルと防災カリキュラムの総点検を行い、特色ある教育活動を展開する
 3. 日々の安全点検・安全教育とともに、自信をもって「命の大切さ」を指導する
 4. 人材の発掘とともに、家庭や地域、関係機関と連携して地域防災力の向上に努める



ちょっとした工夫を

この図は、地震前後の比較を示しています。左上は地震前の神社の正面、右上は地震後の倒壊した神社の屋根。左下は地震前の駅構内と列車、右下は地震後の傾斜した駅構内と列車。

上空から・町や物に焦点

どんな「めあて」で
どんな「資料」で
どんな「手立て」で

少し近づくと...

人の目線の高さで...

何に「着目」させるのか
何を「考える」学習なのか

物から人へ

資料で全く色合いの違う授業になる

学習: 「見えるもの」から「見えにくいもの」へ

問われる一人一人の教師力
学校としての組織力

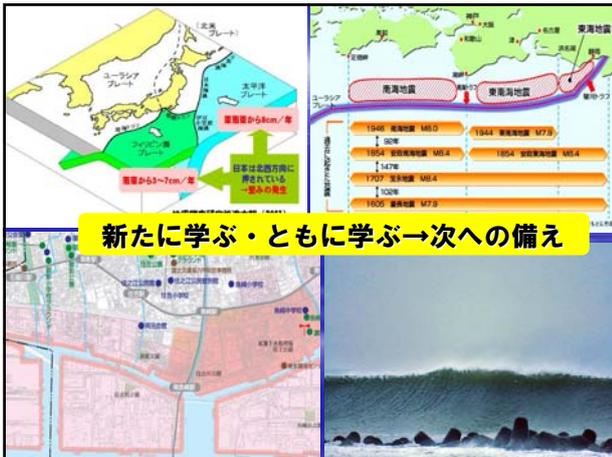
- 防災に関する授業を公開する
→ 参観日や学校公開でも
- 教育課程の位置付けを考える
→ 教科での取組も試みる
(新教育課程を学びながら)
- 防災教育カリキュラムの刷新
→ 自校プランを作り直す

問われる防災教育の日常化
小さな研修の積み重ね

- 何気ない会話が情報交換
→ 風通しのよさが大切
- 笑顔の関係を増やすこと
→ 真顔の時もうまく行く
- 子ども・親・地域を信じる

体験がなくとも躊躇しないで...
 指導者としての主体性を発揮したい

あつく
あたたかく
あたらしく



新たに学ぶ・ともに学ぶ一次への備え

- ◎ 今後に生かしたい「心のケア」の財産化
- ◎ 誰もが「災害時要援護者」になる危険性
- ◎ ともに「体の自由な人々」と生きる社会
- ◎ さらに「防災訓練の充実」を図る努力
- ～シリアス訓練・エンジョイ訓練の工夫～

◆ 震災と復興の過程で得た「教訓」の具体化

3つの「も」モデル・目標・モチベーション

これまでも・これからも 学校は

学校は「信頼」のターミナル

■ 災害時
地域の心のよりどころ
 人々が安心と安全を求めて集まる場所
 「もの」や「情報」が集まる

■ 平時
地域から信頼される教育機関
 次代を担う青少年を育成する場所
 「かかわり」と「期待」が集まる



